

共感と否定

眞鍋由比

今月のはと時計のテーマは「共感力」。

今年の大河ドラマ「西郷どん」の主演・西郷隆盛の魅力を、演じる鈴木亮平はこう言っています、

貧乏な大家族の長男に生まれた吉之助は、困った人を放っておけない。その魅力は「相手の痛みを自分の痛みのように捉え、喜びも自分の喜びのように感じられる『共感力』」にある

ヒトは他者に共感することができる。親しい人に対する共感は自然に湧き上がってくる。それは、ヒトが小さな社会集団で共同生活しながら生き延びるには重要な性質だった。見ず知らずの人々からなる地球規模の大集団に対して、同じような共感が自然に湧き上がるのは難しいし、利害の対立もある。しかし、赤の他人でもないがしろにしてはいけないことは理解できる。(総合研究大学院大学教授・長谷川真理子)

「共感」。難しいこともあります。けれど相手のことを思いやってから話すのであれば、お互いの理解は得やすく、もう少しやさしい、気持ちになれるのでは？

という思いを込めての「共感」特集、はと時計2018年1月号、見てください。

ここで紹介するのは1冊の絵本。『なにか、わたしにできることは？』

ホセ・カンパナーリ・文、ヘスース・シスネロス・絵 西村書店2011

世の中の身震いするようなニュースや孤独に悩む「わたし」。でも魔法の言葉がそれを徐々に治していきます。「なにか、わたしのできることは？」もちろんあなたにできないことまでする必要はありません。ただ、できる範囲で人を助けることができたなら、どんなに明るい気持ちになることか。自分が役に立てる喜び・・・意外と幸せになれるですよ。

新年明けてすぐに映画を見ました。タイトルは「肯定と否定」。ホロコーストはなかったと主張するイギリスの自称歴史家が、アメリカの歴史学者が自分の著書にホロコーストはあった、ないという彼の論拠は間違いと書いたことを名誉毀損だと訴えました。なんとまあ荒唐無稽な話・・・と思ったら実話でした。日本人でホロコーストがなかった、なんて信じる人はいないでしょう。でもイギリスにはいたんです。歴史的事実を、裁判所で争うなんて意味がない・・・と思っても歴史修正主義者は平気で、ウソを広めます。アメリカの裁判なら推定無罪といって訴えたほうがその事実を証明しなくてはいけなくていいので、イギリスの裁判は訴えられた方が事実を証明しなくてはならないシステム。もちろん、証拠はあります。けれど命令書はない。ヒトラーは書類を残さないよう指示していたから。そして証拠写真の重箱の隅をつつくような、どちらか分からないようなあいまいな細かいことを積み重ねて、ウソを証明しようとする男。実際にアウシュビッツの収容所にいた人たちに証言してもらえばいい、と思いました。けれど、そんな男はその被害者たちの数字の入れ墨すらあざ笑って証拠ではないと言い張るビデオがでています。「その刺青でいくら儲けたんだ？」苦勞して苦勞してホロコーストの事実を証明するのですが・・・

この自称歴史家は、ほかにも同様の裁判を起こしていて、それも女性相手でした。自分より弱い相手を叩こうとしたのです。それにしてもこんな歴史的な大事件すら否定する人間がいることに驚きます。

しかし、日本でも南京大虐殺はなかった、とか従軍慰安婦はいなかったということをして大真面目にいう人がいます。大学の同窓会でも年輩の男性が「南京大虐殺の人数が違っていい」とかツイッターでも「従軍慰安婦は金をもらっていたんだからしかたない」とか絡んでくる人がいます。何人だろうと虐殺は虐殺だし、わずかの報酬をもらおうと、戦時に性的に強制搾取されたことに変わりはありません。

最近ではフェイクニュースがまことしやかに流れます。何が本当で何がウソなのか、見分けることが難しい。ジュニアエラの2017年12月号に偽ニュースの見分け方が載っています。偽ニュースを広める人は①相手に勝ちたい人(選挙などで)②楽しみたい人(愉快犯)③金儲けしたい人(収入を得る人)といわれています。その場に居合わせた人が発信するニュースは信じられる。けれどそれ自体がウソかもしれない。そんなときはグーグルの類似画像検索を試みましょう。Googleの画面を開き、「画像」をクリック。そしてカメラのマークをクリック。それから画像をアップロードする(または画像のURLを貼り付ける)すると、どこのニュースが発信元だかわかる。人気の記事が数年前のものだったり、違う国のものだったりすることがわかります。ぜひ試してみてください。そしてウソだとわかったら教えてあげられたらいいね。